

すでに初夏とも言えるの陽光の下、職場の大学構内に淡い橙色の花を群れ咲かせる一角がありました。細い茎の先に四枚の花弁を広げるその姿は可憐で、一見すると美しい野の花です。しかし数日前、NHK ニュースで注意喚起されていた「毒のあるヒナゲシ」——ナガミヒナゲシを思い出し、足を止めました。

ナガミヒナゲシ (*Papaver dubium*/長実雛芥子) は、ケシ科ケシ属の一年草で、ヨーロッパ地中海沿岸原産の外来植物です。最大の特徴は、花後にできる細長い円筒形の蒴果で、まさに写真の実がそれに一致していました。茎や葉にはアルカロイド性物質を含む黄色い乳液があり、傷つけた際に皮膚へ付着すると、かぶれや炎症を起こすことがあります。命に関わる猛毒ではないものの、特に皮膚の弱い子どもには注意が必要です。

発見場所は、子ども園や小学校の子どもたちが日常的に草花遊びや自然観察をする場所でした。そこで私はすぐに写真を整理し、子ども園や小学校の先生方に渡して周知を依頼。同時に施設課へも連絡し、担当者と同現場確認を行い、種子が成熟して飛散する前に安全な駆除をお願いしました。駆除は、手袋・長袖を着用し、できれば開花初期から結実前に根ごと抜き取り、種子を散らさぬよう密封して廃棄(可燃ごみ)するのが基本です。ナガミヒナゲシは一個体で多数の種子を作り、翌年以降も土中種子から発芽するため、継続的な観察も欠かせません。

ニュースで得た知識が、構内の安全管理へと直結した今回の経験は、自然観察において「美しい」「珍しい」で終わらず、その正体を見極める科学的視点の重要性を改めて教えてくれました。一見、可憐な野草にも、時に静かな「魔」が潜んでいるのです。

(2026年5月中旬/文京区お茶の水女子大学構内)

